

探検部の将来に寄せて

岡西賢治

寒さにふるえた者ほど太陽をあたたかく感じる。人生の悩みを
くぐった者ほど生命の尊さを知る

ホイットマン

大学のサークル活動としての探検部の将来性は、それほど悲観的なものではなかろう。しかし、その性格は、時と共に変化していくだろう。

「肉体」・「知性」・「フィールド」この3つは、探検の要素の中で主要な位置を占める。この優先順位によって探検の型も違って来る。

肉体を重視すれば、よりスポーツ的なものになる。知的側面を強化すれば、学術的になる。そして、フィールドの面白さを求めれば、初踏査とか初登攀といったものになる。

関大探検部は、かつて「スポーツ探検」と称していたことがあった。この要素から分類すれば、フィールド重視の活動であったと言える。それは、パート制から企画制へ転換せざるをえなかったという事実にも見ることができる。

ボートが国内外の河川をあらかたやりつくした時、洞窟が一つの頂点に達した時、もうそれは探検ではなくスポーツになった。そして、スペシャリスト的探検部員養成の意味をなくしてしまった。現に、ケイビング・川下りというスポーツとして取り組んでいる人がいる以上、その判断は正しかったと言えるだろう。

そこで、探検部が今後もスポーツ化した探検を排していくとしたら、残された道は二つしかない。

一つは、数少なくなった未踏のフィールドを求めて行く。たとえ、重箱のすみをはじくるようであろうとも、可能性がある以上捨てることはない。誰かが最初にやらなくてはいけないのだから。

もう一つは、知的要素を中心にした活動である。もちろん以前からやられていたことである。しかし、それは教授をリーダーとして学生が連れられて行くという形であったり、便宜的に学問を擬装として使ったという場合が多かった。それは、過去においては必要であったし、意義深いことでもあった。

今、我々はそのような「学術探検」を行う必然性はない。本来、我々が探検部に入部し計画を実現しようとする動機は何か。それは、未知へのロマンチズムであり好奇心であり、また日常性からの脱出でもあろう。仮りに、そのような理由がなくても、やりたいという事実は存在する。そうであれば、ことさら学問などというオブラートに包む必要はあるまい。もし「学術探検」を行うとするなら、それはその人の真の学問的欲求による

場合のみであるべきだ。

ここで問題になってくるのは、単に個人的欲求の実現であれば、組織に所属することなく、勝手に放浪でもなんでも好きな事をやればいい、となってくる。とすれば、探検部の意味は何か。それは、計画に目標を持ち、達成すべく努力するという事ではないか。もちろん、失敗もあるだろうが、学術探検とちがひ成果を持ち帰る義務はない。責任は基本的には自分に対してのみである。したがって、目標もより広く、自由に求められる。

とは言っても、そう簡単にユニークな目標が、見つかるわけではない。そういう場合、誰れもが興味をもちやすい対象として、人間がある。人間は人間の為す事に対して、何かしら興味を持つものである。ましてや、異なる文化・人種のもとにおいては、なおさらである。また調べる手段も幾らでもある。そして、その経験・観察をもとにレポートすれば、それは、十分探検といえるのではないか。

探検という行為は、元来探検する側の一方的行為である。人間を対象とした場合、される側にとっては一方的な迷惑であろう。

また、最近の海外旅行ブームのせいで、ほとんどの地域がバック旅行のようなもので行けるようになった。そこには、海外での活動を、秘境観光旅行といったものに終らせる危険性をもっている。この2点を留意さえすれば、「民族調査的探検」はますます盛んになっていくであろうし、その価値があると信じる。

ところで、探検における組織自体がどのように進むのかという疑問がある。本多勇一氏は『探検は「スポーツとしての冒険」と「観光開発(旅行)」の二つに分解するだろう」と予想されている。

このことを、今まで述べてきたことと合わせると2つの方向性が考えられた。一つは、探検部が

本来もつべきバイオニアワークを捨て、スポーツと観光探検の融合体として存在するか。もう一つは、バイオニアワークを固守し、探検部態を再構築すべく努力していくかである。前者になれば、海外情報研とか、アドベンチャー同好会的クラブとの違い、独自性をいかに出すかに問題が出てくる。後者になれば、「探検とは何か」という、尽きることのない議論を続け試行錯誤していかなければなるまい。どちらにしても、多くの試練が待ち受けているのは疑いない。

(22代)

